扉の向こうはあやかし飯屋

猫屋ちゃき Chaki Nekoya

アルファポリス文庫

https://www.alphapolis.co.jp/

目次

第一話　失恋ＯＬにうまい飯を　5
第二話　マメに飾るより豆を食らいたい　28
第三話　懐深（ふところ）さは生きやすさ　53
第四話　モテたければもてなせ　78
第五話　おしゃれは味付け　110
第六話　優しさで包みたい　130
第七話　年のはじめに願うこと　145
第八話　動き出した気持ち　162
第九話　溢（あふ）れる想いをくるりと包んで　176
第十話　会えない夜とまかない飯と　191
第十一話　ホワイトデーと進まぬ恋路（こいじ）　204
第十二話　言えない言葉は甘くて苦い　227
第十三話　夜桜弁当と門出（かどで）の祝い　243
第十四話　扉の向こうはあやかし飯屋　260

第一話　失恋ＯＬにうまい飯を

習慣というのは恐ろしいものだ。すっかり身体に染みついて、無意識のうちに行動を起こさせてしまう。

酔っていても家に帰り着くことができたり、そうと意識しなくてもあるものを決まった場所に片付けたり。習慣化した行動というのは、まるで呼吸をするようにできてしまうのだ。

「……どうしよう、これ」

茂木若菜（もぎわかな）は、自宅マンションまであとわずかというところで、その習慣によって失敗したことに気がついた。手に提（さ）げたスーパーの袋が重たいなあと思ったときに、ふと我に返ったのだ。

スーパーの袋の中には、ふたり分の食材が入っている。若菜はひとり暮らしなのに。

恋人と別れたことが頭からすっぽ抜けていて、いつもの癖でふたり分の買い物をしてしまったのだ。

三年近く付き合った恋人と別れたのは、つい先週のこと。別れたというより、ふられた。二十六歳の若菜よりも四歳若い、別の彼女ができたのだという。どうやら、しばらく二股をかけられていたらしい。仕事が忙しくて、そんなことには一切気がつかなかった。

ここ数ヶ月、よく夕飯を食べに来るなあとは思っていた。でも、仕事で遅くなるからなかなかゆっくりデートもできないし、料理をするのは好きだから、お家デートのつもりで若菜も気前よく手料理を振る舞っていたのだ。お礼と言って食器の後片付けをしてくれる後ろ姿を見て、結婚生活をちょっぴり意識したりもした。

今になって思えば、あれは新しい彼女に貢ぐために食費を浮かせていたのだろう。そのことに思い至ると、自分もその彼女に間接的に貢がされていたような気がして、すごくみじめな気分になった。

それで数日間は自分のためにお金を使おうと外食して帰ったり、デリバリーを頼んだりしていた。

だが外の味にも飽きてきたし、結局手間暇かけて料理するのが好きなのだと改めて気がついて、久しぶりに夕食を作ろうと張り切っていたのに……

泣きたくなって、若菜はスーパーの袋の中を睨んだ。

腕にずっしりとくる重みは、丸ごと買ったカボチャのせいだ。元彼がカボチャ好きだから、無意識のうちにカゴに入れてしまっていた。

丸ごと一個なんて、はっきり言ってかなり持て余す。ひとり暮らしなら、半カットか四分の一カットで事足りるから。

それに、若菜はカボチャがそんなに好きではない。おまけにまだ九月の終わりで、旬には少し早い。

元彼の存在が当たり前になっていたことを思い知らされて、若菜は猛烈に悲しくなった。

浮気をされていたとわかった時点で百年の恋も冷めたと思っていたのだけれど、想いはなくなっても習慣は残った。それほどまでに長く、親密に付き合っていたにもかかわらず、若菜は捨てられたのだ。

捨てられたという事実が、今ここにきて胸にずしんとのしかかってくる。このカボ

チャのように。

天ぷら、フライ、煮つけ、プリン……大して好きではないから、調理法がそのくらいしか思いつかない。この丸々一個のカボチャをどうやって消費しようかと考えると、悲しみはじわじわと強くなっていく。

「あの……大丈夫ですか？」

不意に声をかけられ、若菜は我に返った。そして、傍から見た自分のやばさに気づく。

夜の八時過ぎに道端でカボチャ片手に涙ぐんでいる女なんて、不気味にもほどがある。

手の甲でさっと涙を拭って、若菜は声をかけてきた人に向き直った。

「すみません。大丈夫です。ちょっと、ぼーっとしてしまって」

声をかけてくれたのは、若菜と同い年か少し上に見える男性だ。すらりと背が高く、さっぱりしょうゆ顔の優しげな人だった。

本当に親切心からの声かけだったらしく、まだ心配そうに若菜を見ている。

「もしかして、カボチャが嫌いなんですか？」

「え？」

「カボチャを手に涙を流してたので、泣くほど嫌いなのかなって……」

そっとカボチャを指さされ、若菜の頬はカッと熱くなる。街灯の下でも、涙の跡くらいは隠せると思っていたのだ。

「そうなんです。そんなに好きじゃないのに丸々一個買っちゃって、どうやって食べきろうって思ったら、何だか泣けてきてしまって……」

ばっちり見られていたのなら仕方がないと、開き直って若菜は白状した。ごまかすように笑みを浮かべてしまって、痛々しいと思われなかったか不安になる。だが、男性は真剣な顔で頷いて、それから微笑んだだけだった。

「よかったらそれ、うちで調理しましょうか？　俺、この近くで店をやってるんですけど」

男性はよく見ると、黒のカフェエプロンっぽいものを身につけている。手には小さめのビニール袋を提げていて、何か買い足しに出ていたのが見て取れた。

「この近所のお店ですか。全然知りませんでした……」

若菜が住んでいるのは、ファミリー向け物件が多い住宅街だ。だからコンビニや

スーパーは充実していても、飲食店はほとんどない。仕事柄、飲食店の情報には敏感になっていなくてはいけないから、若菜は俄然興味がわいた。

「まだ、オープンして間もないんです。あの、おいしく料理するんで、よかったら来ませんか？」

男性は生真面目そうな様子で若菜を誘う。

カボチャを持て余している若菜に同情したのか、若菜に持て余されているカボチャに同情したのか。

わからなかったけれど、この人がどんな料理を作るのか気になった。だから、若菜は頷いていた。

「はい。ごちそうになります」

よく考えたら知らない男の人についていくなんて危ないのでは、と歩きながら気づいたものの、危険を感じるより先にその店とやらに着いてしまった。

若菜の住んでいるマンションを通り過ぎ、一本奥まった細い道に入って古い家々の間を進んでいくと、その店はあった。

「……まんぷく処」

門に吊るされた提灯の丸っこい文字を読んで、それが店名なのだとわかる。

「どうぞ」

そう促されて門扉を抜け、飛び石の上を歩いていくと、入り口はオーク材の重厚なドアだった。名前も看板も和風なのに。

格式の高いフレンチレストランみたいだなと身構えたが、ドアを開けてもらって中が見えると、意外にこぢんまりしていてほっとする。

「和風創作ダイニングですか？」

無垢材のテーブルが二脚とカウンターがあるだけの、比較的狭い店だ。店内は柔らかなオレンジ色のライトに照らされている。足元を照らす間接照明は籐で編まれた丸い籠で、南国リゾートのような雰囲気もある。和食が出てきてもいいし、アレンジを利かせたイタリアンやフレンチでも違和感はないなと、若菜は分析した。

「創作ダイニング、なのかな？　お客さんが喜ぶものなら何でも作りたいって思ってます」

男性は爽やかに微笑むと、若菜に手を差し出した。少し考えてから、カボチャを渡

せという意味なのだとわかって、持っていたものを男性の手に乗せた。
「嫌いなものはありますか？」
「特にありません」
「じゃあ、おいしいの作りますね」
得意げにカボチャを掲げると、男性はカウンターの向こうのキッチンに入っていった。若菜がカウンターの椅子に腰かけようとしたところ、足に何かふわっとしたものがまとわりついてきた。
「わっ……え、子猫？」
足元に目を凝らすと、白くてふわふわしたものが丸まっているのが見える。
「こら、スネ！　お客さんをこかそうとするな！　すみません。そいつ、人の足にまとわりつくのが好きで」
「そうなんですか……可愛い」
スネと呼ばれた毛玉は、丸まった状態でもぞもぞと男性のいるキッチンのほうへ行ってしまった。もこもことしたお尻をわずかに振りながら動くのが愛らしい。動いている姿は、子猫というより小さな天竺鼠のようだ。

若菜は猫カフェなどのアニマルカフェにわざわざ行くことはないが、猫のいる喫茶店なんかは好きだ。思わぬ出会いに、心がほっこりする。
若菜が毛玉に見入っている間に、男性――まんぷく処の店主は、手早く調理を進めていく。
タマネギを炒め、そこに小麦粉を加え、少し練ってから牛乳を少量ずつ入れていく。簡易的なホワイトソースを作っているのがわかった。
そのあと、電子レンジで加熱したカボチャも加える。
（カボチャグラタンかな）
漂ってくる甘い匂いに、若菜の身体は素直に反応した。手間がかかるわりにあまりメインという感じがしないためなかなか作らないけれど、グラタンは好きなのだ。カボチャの消費方法としてグラタンには思い至らなかったから、なおさらわくわくしてくる。
そのまま器に入れて焼くのかと思いきや、次に店主は白米と刻んだ野菜やキノコをフライパンで軽く炒めていた。どうやら、ドリア風のものになるらしい。
炒めた白米を耐熱の器に敷き詰め、ソースをかけ、チーズを乗せてオーブンに入

れる。

流れるようなその動作を、若菜は邪魔にならないように見守った。

自分も料理が趣味だからか、若菜はオープンキッチンやこういうカウンターで店の人が料理をしているのを見るのがわりと好きだったりする。ピークタイムの慌ただしい様子はつられて焦るから嫌だけれど、そうでないときは眺めているのが楽しい。

それからしばらく待っていると、木製のプレートに乗せられたグラタン皿が運ばれてきた。

「はい、できました」

「わあ……！」

焦げ目のついたチーズの香りが鼻腔をくすぐり、立ち上る湯気と煮えてグツグツしているホワイトソースが視覚を刺激し、食欲をそそられる。

「いただきます」

若菜は手を合わせ、器に添えられた木のスプーンを握った。そして、優しい黄色のソースとその下の米をすくう。ホカホカと湯気の出ているそれに何度か息を吹きかけるが、しっかり冷めるまで我慢できず口に運んでしまう。

「あっつ。……でも、おいしい。甘いソースとご飯がよく絡んで。このお米、ただのバターライスじゃなくて、ほんのりカレー味なんですね！」

ひと口食べただけで、そのおいしさに若菜は感激した。

「ホワイトソースにすごくコクがあって、カボチャとよく合いますね。ご飯がカレー風味だから甘めのソースが引き立ってます。それに、チーズと一緒に上にまぶした粗めのパン粉とか、ご飯の中のキノコ類とか、異なる食感がいろいろあって口の中が楽しいです」

はふはふと食べる合間に、若菜はこのカボチャのドリアがいかにおいしいかを伝えようとした。

日頃、仕事の関係で様々な店に行く。大衆食堂から、人気チェーン店、ちょっとした高級レストランまで。そういうところでももちろんおいしいものにありつくことはできるが、今食べているドリアほどの感激はめったにない。

食べているとわくわくして楽しくなるような、そんな魅力がこの料理にはあった。

「すごく食レポ、お上手ですね」

「すみません。仕事柄、つい癖で。どうおいしいのかいちいち言葉にしてしまって」

「喜んでもらえてよかったです」

店主は若菜が食べる様子をさりげなく、だが嬉しそうに見ていた。邪魔にならない程度の視線だし、そっとお冷のおかわりを注いでくれるなど、気働きも心地よい。

小さな洋食店や昔ながらの喫茶店で食事をするのが若菜は好きなのだが、この店の雰囲気はそういった場所に似ている。常連たちによって支えられている、隠れ家的で特別感のある店に。

「ごちそうさまでした。すごくおいしかったです」

スプーンを置いて、若菜は手を合わせた。お腹も満たされたが、それ以上に心が温かくなったのを感じている。久しぶりにうんとおいしいものを食べたという満足感だけでなく、もっと何かいいもので心が満たされていた。

「よかった。元気になったみたいで」

店主は、安堵したように若菜を見ていた。この店に来ることになった経緯を思い出して、若菜の顔は再び熱くなる。

「……すみません。ご心配おかけしました。カボチャ持って突っ立ったまま泣いてたら不気味だし、不審に思いますよね。それなのに、声をかけてくださってありがとうございます」

「そんな、不気味だなんて。そういうことではなくて、何だか放っておけなくて……消え入りそうに見えたんですよね」

「……そんなに、生気がなかったですか……」

苦笑いを浮かべる店主を見て、あのときの自分はよほどおかしな様子だったのだなと若菜は理解した。

思えば、この一週間は呆然としていた。悲しんだり怒ったりせず、ただ淡々と日々をやり過ごした。そうするのが、大人だと思っていたから。

たかが失恋ごときで、大人の女性が取り乱してはいけないと思っていたのだ。それに、浮気するような男との別れで気持ちが乱れてしまうのも癪だった。

だから、つらいという感情に蓋をして、しなやかに受け流したふりをしていたのだ。そのせいで突然感情が爆発してしまうなんて思いもせずに。

「何か悲しいことがあったんですか？　あの……話せば楽になるかもしれませんよ。俺は、聞くことしかできませんけど」

生真面目な様子で、店主はそう申し出てくれる。客商売が上手な人特有の気遣いな

どではなく、本当に親切なのが伝わってくる。その言葉によって、こうして誰かに話を聞いてもらう機会が欲しかったのだと気づく。

友人たちには、まだ恋人と別れたことを伝えていなかった。二十六歳という年齢は、みんなそれぞれ仕事が充実していたり、婚活に励んでいたりする。そんなポジティブな方向で忙しい人たちに、わざわざネガティブな報告をしたくなかったのだ。……そう思っていたが、実際は見栄もあったのだと思う。

納得ずくで別れたのならまだしも、ふられたのだ。しかも浮気をされて。三年近くも付き合ったのに。そのみじめな状況を、親しい人に知られたくなかったのだと今ならわかる。

だが、そんなふうに見栄を張ったせいで、道端でカボチャを手に涙を流すはめになった。

「実は先週、恋人にふられてしまって。平気だと思って過ごしてたんですけど、意外にショックだったみたいで。もうふたり分の夕飯を作らなくてもよくなったのに、そのことを忘れて食材をふたり分買ってしまったことに気づいて、それであんなふうになったんです。……たかが失恋なのに、恥ずかしいですよね」

聞いてくれるというのならもうこの際話してしまえと、若菜は口を開いた。だが、やはり自分のみじめな事情を話すのは恥だと感じてしまう。もっと素直に同情を欲することができたら楽なのだけれど。

「まったく恥ずかしいことではないですよ。恋人と別れるのは、悲しいことですから。失恋って、ただ恋が終わるだけじゃなくて、それまで過ごしてきた居場所とか時間の喪失に等しいと思うんです。それが悲しくないわけありませんよ。だから、思いきり悲しんでいいんです」

店主は言葉を選び、真剣に話した。わかりやすい励まし方ではない。だが、その言葉は若菜の胸にしっかり届いた。

「そっか……居場所や時間の喪失。だから、こんなに悲しかったんですね。それに、悔しかったんです。私はいきなり放り出されたのに、相手にはもう新しい居場所があるんですから……」

言いながら、そうだったのかと納得する。悔しかったから、それが邪魔をして悲しむことができなかったのだと。

「ただふられただけじゃなくて、浮気されてたんです。……二股をかけられて、その

挙句に私は捨てられた。三年近く付き合ったんですけど、選ばれたのは新しいほうの彼女だった。……確かに、付き合いたてのときのような刺激はなくなってたけど、好きだったのにって思うと悔しくて……」

一度素直に認めてしまったら、言葉は次から次へと溢れ出た。言葉と一緒に、思いも涙も溢れ出す。

元彼とは、友人の紹介で知り合った。情報通で、おいしいものをたくさん知っている人で、若菜と気が合って、すぐに付き合い始めた。ふたりでいろんなところへ出かけたし、口に出さなくても、彼は若菜の喜びそうなものを見つけてきてくれた。食べるのが好きな人だったから、若菜は彼のために様々な料理を作れるようになった。

喧嘩もたくさんしたが、それ以上に笑い合って過ごしてきた三年。その思い出を彼が裏切って、簡単に捨て去ってしまったのが悲しくて悔しかったのだ。

「よくふられることを捨てられるって言いますけど、俺は違うと思います。お客さんは、捨てられたんじゃありません。人と人との縁にも賞味期限があって、その期限が過ぎるとぶつかることが増えたり、よくない影響を与え合ったりするようになるらしいです。だから、期限切れの縁はさっさと手放してしまったほうがいいそうで

す。……何かの聞きかじりですけど。とにかく、捨てられたとかではなく、よくない縁が切れたってことで、喜んでいいんですよ」

「そう、ですね」

若菜を励まそうと、店主は力強く言う。その気持ちが嬉しくて、若菜は涙を拭って微笑んだ。

「何でも、おいしく食べられるときに食べてしまうのが一番ですよね。……カボチャ、おいしく食べられてよかったです。あのまま帰ってたら、きっと傷ませてだめにしちゃってました。ありがとうございます」

若菜は、ここに来る前よりずっと、心が軽くなったのを感じていた。この偶然の出会いに感謝する。

今ここにいなければ、若菜はこうして笑えなかったに違いない。打ちのめされたことに気づかぬまま、自分をごまかして日々を過ごしていたはずだ。そのせいで、立ち直るのにももっと時間がかかっただろう。

「今日は早くお出ししたいと思ったから、何だかまかないみたいなものになってしまってすみません」

若菜の笑顔と言葉に対し、店主は面映ゆそうにした。

「私のほうこそ、不審者だったのに声をかけていただいて……。それにお料理、すごくおいしかったです。プロの方にこんなことを言うのは失礼かもしれませんが、お母さんのご飯って感じでした。優しくて、温かくて」

もしかしたらまだ開店したばかりでいまいち自信が持てないのだろうかと思い、若菜は感じたことを正直に述べた。

「そう言ってもらえて嬉しいです。世の中のお母さんって、ある意味どの料理人よりも食べる人のことを考えて作ってますから。俺もそうありたいと思ってますし、この店はおいしいご飯が必要な人を台所に招くくらいの感じでやっていきたいんです。だから、お母さんの料理っていうのは、最高の褒め言葉です」

店主は屈託なく、少年のように笑った。さっぱりとしたクール系の顔立ちをしているのに、そうやって笑うと可愛らしくなる。その笑顔にまた、若菜は元気をもらった。

「あの、私、茂木若菜と申します。フリーペーパーのグルメ記事の編集をしております」

いつまでも失恋カボチャ女ではいたくなくて、若菜はカバンから名刺を取り出した。

またここに来店したとき、〝カボチャの人〟とか〝失恋した人〟とかで思い出されるのが嫌だったのだ。

「茂木若菜さん……情報誌の方ですか。うち、取材はちょっと」

「あ、違います。そういった意図ではなく、ただ名乗りたかっただけなので」

「そうだったんですね。俺は古橋です。古橋満」

店主――古橋は若菜の名刺を見て焦った様子だったが、取材の申し込みではないとわかるとほっとしたように名乗ってくれた。

確かに取材の意図はなかったが、そうあからさまに困った態度を見せられると若菜としては残念だった。

しかし、店内を見回せば納得だ。客が十人入るか入らないかのこぢんまりとした店が情報誌に載れば、あっという間にキャパシティオーバーになる。予約制にしたところで、うまく回していくのは難しいだろう。最初は一ヶ月待ち二ヶ月待ちでも我慢してもらえるかもしれないが、その待ち時間が明ける頃にはお客さんの多くは熱が冷めてしまっていた……というのはよくある。

そうして一時的に話題になっても常連客はつかず、結局店にとってあまりメリット

がなかったということになりかねない。
それならここは、自分だけの隠れ家にしておこうと若菜は心に決めた。
「まんぷく処は、おひとりでやられてるんですか？」
「いや、皿洗ってくれたり掃除してくれたりするのがいるんですけど……今日は隠れてます」
「か、隠れてるんですか。恥ずかしがり屋なんですね」
変わり者ではあるようだが従業員がいるとわかって、若菜は少しほっとした。どんなに小さな店でも、やはりひとりで切り盛りするのは大変だろうから。こういういい店の店主には、無理せず長く続けてほしい。
「あ、もうこんな時間。長々と居座ってしまってすみません。お会計、お願いします」
腕時計を見ると、もう二時間以上ここにいる。おいしいものを食べて話を聞いてもらううちに、あっという間に時間が経っていた。
「会計……どうしよう。値段、決めてなかったからな。初来店サービス、ということじゃだめですかね？」
困った顔で尋ねてくる古橋に、若菜は首を横に振った。この店主はいい料理を作る

し、接客態度も申し分ないが、商売っ気がないのが心配だ。
「ただでごちそうになるわけにはいきません。今日のところはこのくらいでいいですか？　次に来たときに、またうんとおいしいものを食べさせてください」
若菜はカウンターに二千円を置いた。たしか、小洒落たトラットリアでラザニアを食べたときは、このくらい支払った覚えがあるのだ。それよりも多少色をつけてはいるが。
「こんなにいただいて……ありがとうございます」
「ごちそうさまでした。本当に、おいしかったです」
名残惜しいが、若菜は席を立った。古橋もカウンターの向こうから出てきたところを見ると、どうやら見送ってくれるらしい。
若菜がドアに向かって歩き出すと、また足元に毛玉がまとわりついた。
「あ……スネちゃん、またね」
「そっちはコスです」
よく見れば所々に茶色や黒色の毛が混じっている。先ほどの子とは違う個体のようだ。若菜が撫でようとすると、またもぞもぞとどこかへ行ってしまった。

オーク材のドアを開けると、外は真っ暗だった。だが、すぐにパッと灯りがつく。

「あっ……！」

外までついてきてくれた古橋が、灯りのほうを見てなぜか慌てた顔をした。その視線の先には、オレンジ色の光を放つ提灯があり、まんまるの目がついている。

「少し早いハロウィンの飾りですか？　可愛いですね」

どういう仕組みなのかわからないがふわふわ浮いているし、目もキョロキョロと動いている。最近はこんな凝ったものもあるのだなあと若菜は感心して見ていたが、古橋は何だか複雑な様子で微笑んでいた。ハロウィンまで隠しておきたかったのかもしれない。

「おいしいご飯、ごちそうさまでした。それと愚痴まで聞いていただいて……。ありがとうございます。明日からまた、頑張れそうです」

若菜がペコッと頭を下げれば、古橋も深々とお辞儀を返してきた。

「またいつでも来てください。お待ちしてます」

自宅マンションに向かって、若菜は歩き始めた。スーパーからの帰り道と違い、足取りが軽いのを自覚する。

足取りが軽いのは、きっと心が軽いからだ。悲しみと悔しさを吐き出し、おいしいものでお腹が満たされ、幸せを感じることができている。

「……おいしかったなあ」

幸福な気持ちで、思わず呟いてしまう。

思いを込めて作った料理は、時に誰かを救うのだと若菜は改めて感じた。

だから、時間に余裕のあるときは手間暇かけて料理をしようと心に決めた。自分のために、自分のためだけに。

そして、また〝まんぷく処〟にも必ず行こうと決めた。古橋がどんな料理を作るか気になるし、何よりあの店の雰囲気が気に入ったから。

新たな楽しみが生まれたことで、若菜は明日を生きていく気力を取り戻したのだった。

第二話　マメに飾るより豆を食らいたい

若くてキラキラした女の子たちのＳＮＳを眺めながら、若菜は「何だかなあ」と心の中で溜息をついた。

ブランド物のバッグ、人気のコスメ、サロンで施されたネイル、可愛らしいアートで飾られたカフェラテやふわふわクリームたっぷりのパンケーキ――女の子たちはたくさんの素敵なものを集めてＳＮＳという場所で披露している。

フォロワーが十万を超えるような人気者になると、その人のページはそれ自体がひとつのコンテンツとして成立する。見られることや魅せることに執心しているから、その見せ方もうまい。

若菜は仕事のためのリサーチで食べ物を多く投稿しているページを主に見ているのだけれど、そのキラキラふわふわした食べ物写真の群れに、若干胸焼けがしてきた。

「ＳＮＳ映えするキラキラ可愛いフード特集かあ……」

編集長に振られたネタをもごもごと復唱しても、アイデアの片鱗すら浮かばず胸がモヤモヤする。胸焼けなのかモヤモヤなのかあるいは両方なのか、わからないけれど若菜はとりあえず席を立った。このままデスクに詰めていても何か浮かぶとは思えない。

直近の締切はクリアしているし、チェックしなければならない写真はまだ送られてきていない。今なら少しくらい外出しても許されるだろう。他の社員たちも同じような状況なのか、今日はほとんどの人が出払っている。みんな気分転換と取材を兼ねて外出しているのだろう。

若菜が所属しているのは、七名ほどが在籍する小さな部署だ。それぞれ担当を持ち、グルメ、レジャー、美容などの記事で構成されるフリーペーパーを発行している。そこで若菜はグルメコーナーを担当しているのだ。人数が少ないぶん、企画出しも取材も原稿執筆もそのチェックも、担当者がひとりで行う。

企画出しのときに編集長から「若い女の子が喜びそうな、ＳＮＳ映えするキラキラ可愛いフード特集やろうよ。若い女の子代表として茂木ちゃん、よろしくねー」などと言われたときから憂鬱だったのだけれど、いざこの企画に取りかかるとなると憂鬱

どころの話ではない。

二十六歳は〝若い女の子〟というくくりに入るのか微妙だし、ＳＮＳ映えする食べ物なんて苦手な部類だ。

カラフルなホイップがうずたかく盛られたパンケーキ、ベリーソースたっぷりのドーナツが乗ったドリンク、キュートな動物の形をしたアイスなど、見るぶんには楽しいし、仲のいい人と話題づくりのために食べるのならありだと思う。

でも、そういった食べ物を目で見たり、話題にしたりする以外の楽しみ方ができるかというと話は別だ。お腹を満たして幸せな気持ちを味わうものかどうかで考えると、違うなと感じる。

ＳＮＳ映えする食べ物というのは、〝映え〟という言葉が示す通り見た目重視のものがほとんどだ。だからいざ食べてみても見た目以上の驚きを得られるものは少ない。

テレビ番組のグルメコーナーでレポートするタレントが、うっかり「味は普通ですね」と言ってしまったのを見たことがあるけれど、その人の言う通り〝普通〟という感想を抱くことが多いのだ。ひどいときはそれ以下で、味の感想を述べるに足らないものもある。

それに、ＳＮＳ映えする食べ物というのは見た目のインパクトを重視するあまり、量がものすごく多かったり大きかったりする。そのせいで、食べきれずに残されたり捨てられたりすることもあるのだ。

そのことを責めようとは思わないけれど、取材のためとはいえ、とびきりおいしいわけではなく、食べ残されるかもしれない食べ物をリサーチするのは気が乗らなかった。

憂鬱な気分は加速していき、それはやがて将来の不安へとつながっていく。

（こんなんで本当にいつか、やりたいことをさせてもらえるのかな……）

若菜は食べることが好きだ。そして料理をすることも。だから転職して、今の会社に入ったのだ。

本来もっと別のことがしたくて現在の部署にいるのだけれど、グルメコーナーを頑張ればそれができるかもしれないと言われている。でも、ときどき不安になるのだ。本当に今歩いているこの道は、行きたい場所につながっているのだろうか、と。

（いかんいかん。弱気になるのは、お腹が空いてるせいね。腹が減っては戦はできぬって言うし、まずは腹ごしらえをしよう）

ひとまず何か食べに行こうと、若菜はお気に入りの店に向かった。

若菜が向かったのは、雑居ビルの一階にあるカレー屋。夜しか営業していないモツ鍋屋を昼だけ間借りしているため、看板も店内のお品書きもモツ鍋屋のものという変わった店だ。でも、ここで食べられるカレーは絶品で、若菜の秘密にしておきたい店のひとつだった。

「チキンカレーと、ラッシーをください」

「ミントラッシーっていうのを試作したんですけど、よかったらどうですか?」

席に着いてすぐやってきた店員に注文すると、その店員の女の子に笑顔で勧められた。

「ミントかあ。さっぱりしてそうですね。じゃあ、それで」

「かしこまりました」

本当は普通のラッシーが飲みたかったなあと思いつつも、にこやかに勧められると断りづらかった。それに、新しいものを試すのは大切なことだ。新しい店の開拓が必要なのはもちろんだが、安心して通えるいつもの店でも新しいメニューや食べたこと

がないメニューには手を出していかなければならない。そうすることで記事のアイデアや企画が生まれるのだ。

注文したものが運ばれてくるまでの間に、若菜はスマホで情報収集を再開した。十代後半から二十代前半の女性に人気のアカウントを中心にチェックしているけれど、若菜の会社が出しているフリーペーパーの読者層とは微妙にずれている気がする。

主な読者層であるアラサー以上の、しかも主婦層を狙おうとするなら、ただ単にキラキラしたポップなものでいくよりも、ちょっぴりラグジュアリーな要素を加えるかまたはナチュラル志向のもので特集を組んだほうがよさそうだ。ただ、そうするとわかりやすいインパクトに欠けそうなのが難しいところである。

「お待たせいたしました。チキンカレーとミントラッシーです」

「わあ。いただきます」

悩み始めたところで頼んでいたものが運ばれてきて、若菜はスマホを置いた。食事のときくらいは仕事のことを忘れないと疲れてしまうし、何より集中しないと食べ物に失礼だと思っている。

若菜はルゥと米の境界線にスプーンを入れ、両方を同時に口に運んだ。そうするこ

とで米に絡んだルゥの風味を楽しむことができる。

ここの店のカレーはビーフとポークとチキンの三種類があって、ビーフはコクのある深い味わい、ポークは昔ながらの親しみやすい甘口、そしてチキンはこだわりのスパイスが利いた辛口になっている。全種類食べた上で、若菜はチキンカレーが一番のお気に入りになった。

（サラッとしてて食べやすいのに、鼻に抜けるスパイスの香りが強いんだよね。それに、あとから口いっぱいに広がる辛さがたまらない！　うまい！）

チキンカレーはこうでなくてはと、若菜は心の中で叫ぶ。誰かに聞かせるものではないから、食レポというよりただの感想だ。だがこの仕事を始めてからは癖になってしまい、食事中はいつも頭の中がこういった文字でいっぱいなのだ。

「うぅ、辛い。……ラッシーを飲めばいいのか」

口の中がヒリヒリして、うっすらかいた汗を拭った。そのときになって、若菜はようやくラッシーを頼んでいたことを思い出す。

ミントラッシーというけれど、色はうっすら緑がかっているだけだ。目を凝らせば何やらツブツブしたものが見えるものの、表面に添えられた葉くらいしかミント要素

はない。

ちょっと地味だなと思いつつひと口飲んで、若菜はその味に感激した。

「爽やか……」

基本は飲むヨーグルトに似たごく普通のラッシーの味なのだけれど、そこにミントが加わることでさっぱりとした印象になる。その爽やかさが口の中の辛味を和らげてくれ、あとに清涼感が残る。ここの店のラッシーは本格志向で甘みが強く濃厚なのだけれど、ミントの爽やかさがそれを抑えているから、こちらのほうが飲みやすいと感じる人もいるかもしれない。

若菜はチキンカレーのスパイシーさとミントラッシーの爽やかさを交互に楽しみながら完食した。

「ごちそうさまでした。おいしかったです」

「ミントラッシー、どうでしたか？」

「すごくよかったです。これからチキンカレーとはいつもセットで頼みたいくらい。辛いものによく合うと思います」

「よかったー。じゃあメニューに追加しちゃおう」

会計のときに感想を述べると、店員の女の子は嬉しそうに笑って〝ミントラッシー〟と書いたマスキングテープをメニュー表に貼りつけていた。もともとメニュー自体も手作り感溢(あふ)れるものなのだけれど、そうやってマステを貼るとさらにその感じが増す。

（手作り感といえば、あのお店も温かでいいお店だったな。料理のお値段を決めてないのが気になるけど）

若菜はふと、あの夜に訪れた不思議なレストラン――まんぷく処のことを思い出した。

道端で泣いていた若菜を見かねて、店主である男性が店まで連れていってくれたのだ。そのときに食べさせてもらったカボチャクリームのドリアは、優しい味わいだった。こぢんまりとした店内の雰囲気も、足元にまとわりついてきたふわふわの生き物も、また行きたいと思わせる要素だった。

「今夜あたり、また行ってみようかな」

そんなことを考えると、カレーを食べてお腹がいっぱいのはずなのに、若菜は夕食が待ち遠しくなってしまった。

まんぷく処に行くことを考えてわくわくしていた若菜だったけれど、結局会社を出ることができたのは二十時を回ってからだった。

「こんばんは。まだオーダーってできますか？」

不揃(ふぞろ)いに並んだ石畳の上を足早に進み、重厚なオーク材のドアを開けると、若菜は開口一番に尋(たず)ねた。時刻は二十一時過ぎ。早いところならラストオーダーが終わっていてもおかしくない。

「いらっしゃいませ。まだ大丈夫ですよ」

「よかったー」

「また来てくれたんですね」

店主の古橋は若菜を見て嬉しそうにした。その柔らかな笑顔と店内のほの明るい照明に導かれて、若菜はカウンター席に座った。

「ここのお料理と雰囲気が気に入って、また来ちゃいました」

「来ていただけて嬉しいです。ご近所さんだから、もしかしたらとは思ってたんですけど」

古橋はニコニコしながら言う。人懐っこい笑顔だ。

歓迎するとでもいうように、足元にあの毛玉がまとわりついてくる。だが、姿を確認しようとすると、そそくさと隠れてしまった。

「今夜は何かおすすめはありますか？」

「豆腐づくしのメニューをおすすめしてます。いいお豆腐が入ったので」

「じゃあ、それをお願いします」

注文してから、若菜は静かに店内を見回した。いくつかのテーブル席にはさっきまで客がいたような気配があるけれど、今はカウンター席にひとりいるだけだ。小さな店だから混んでいなくてよかったなと思う。繁盛していてほしいけれど、こうしてゆっくり隠れ家気分を味わえるのもいい。

古橋は若菜の料理を作りながら、カウンターに座るもうひとりの客のほうをチラチラ見ていた。その客は酔っているのか疲れているのか、カウンターに頭がつきそうなほどうなだれている。

「お待たせしました。まずはカプレーゼ風冷奴です」

「わあ、可愛い！」

青いガラスの小鉢に盛られて出てきたのは、カットトマトと刻んだバジルが乗った豆腐だ。カプレーゼ風と言うだけあって、その盛りつけで出されると豆腐がモッツァレラチーズに見えてくる。

「いただきます。……オリーブオイルがかかってるのかと思ったら、細かい鰹節とお醤油？　でもそれだけじゃないさっぱりとした風味がありますね」

「それ、梅カツオのドレッシングなんです。それをかけてサラダをお出しすると、みなさんどんどん食べてくださるのでこの冷奴にもかけてみました」

「すっごくおいしいです！　大根サラダにかけても絶対おいしいし、長芋を拍子木切りにしたものにかけても合いますね。このドレッシングの作り方、知りたい……」

「秘密です。ここに来てたくさん食べてくださいね」

冷奴とドレッシングのおいしさに感激する若菜に、古橋は笑顔で言った。さすがは店主だ。うまいなあと若菜は思う。

「お次は揚げ出し豆腐です」

「ちっちゃい！　ひと口サイズなんですね」

「豆腐づくしでいろいろ食べていただこうと思って、ひとつひとつを小さめにして

ます」

「おいしい！　小さいから出汁醤油がよく絡んでて。それにこの出汁醤油がほんのり甘いのもいいですね」

乗せられた大根おろしと共に揚げ出し豆腐を口に運び、若菜はうっとりした。砂糖醤油というほど甘いわけではないのだけれど、ほのかに感じる甘みというのは、気持ちをほっとさせてくれるものだ。これは普通の出汁醤油よりも、次々箸が伸びてしまう。

「お次は麻婆豆腐です」

「あれ？　あまり赤くないんですね」

「そうなんです。和風仕立てにしてみました」

「和風ですか！」

肉豆腐っぽい見た目だなと思いつつそれをレンゲですくって食べて、若菜は目を見開いた。

「ちゃんとほんのり辛くておいしいですね。豆板醤とかは入ってなさそうなのに」

すき焼き風の味を想像していた若菜は、その期待を見事に裏切られた。

口に含んですぐに感じるのは甘辛い餡の味なのだけれど、そのあとから鼻に抜けるピリッとした辛味がくるのだ。

「山椒と生姜なんですよ。これがいい仕事をしてくれるんですよね」

「本当、いい仕事ですね。おいしいです」

それはあとを引くおいしさで、若菜はあっという間に平らげてしまった。ご飯が恋しくなってしまう。もしここに白米があれば、いつもより食べてしまいそうだ。

「では、最後は湯豆腐です。ポン酢には一味唐辛子やもみじおろしを入れて食べてもおいしいですよ」

「湯豆腐、いいですね。涼しくなってきたから、食べたいなと思っていたんです」

「取り寄せた温泉水で作ってるんで、角が取れて柔らかいんですよ」

「本当だ！　温泉湯豆腐が食べられるなんて嬉しいです」

目の前に出された小さな土鍋の中には、乳白色の湯に浮かぶとろりとした豆腐。それを杓子ですくってポン酢にくぐらせてから食べると、豆腐とポン酢の香りが口いっぱいに広がり、咀嚼せずともほろっと崩れて喉をすべり落ちていく。

そのあまりの柔らかさと口どけに、若菜の脳裏には「豆腐は飲み物」という言葉が

浮かんだけれど、古橋に通じなかったら恥ずかしいから言わずにおいた。黙って薬味を足し、残りの豆腐もおいしくいただく。

「まだお腹に余裕はありますか？　豆腐のアイスがあるんですけど」

「食べます！　甘いものは別腹なんで」

「よかった」

目を輝かせる若菜を嬉しそうに見て、古橋は素焼きの器に盛りつけたアイスクリームを出した。

白っぽいアイスクリームの上には柚子ジャムがかかっており、よく見ると中にも何やらツブツブしたものがある。

「レアチーズっぽい味なんですね。でも、普通のチーズ系のアイスよりさっぱりして食べやすいです。お豆腐のおかげですね。んー、おいしい！」

湯豆腐で温まった身体にアイスクリームの冷たさは心地よく、柚子ジャムと中に入ったチーズの酸味が口の中をさっぱりさせてくれる。ひとさじひとさじ大切にすくって食べ終わる頃には、若菜は身も心も満たされ、仕事の疲れもいくらか癒えていた。

「ごちそうさまでした。今日のお料理も、本当においしかったです」

「それはよかったです」

「京都旅行でお豆腐料理のコースを食べたことがあるんですけど、それに負けないくらいおいしかったです。大豆の味や香りが残ってて、それらが主張しすぎずポン酢や薬味ともマッチしてて。いいお豆腐が手に入ったって言ってましたけど、きっと豆から何からこだわって、大事に作られてるんだろうなあ」

心の底から感激して、しみじみと若菜は言った。本当においしいものを食べたとき、それを料理した人にはもちろん、食材を作った人にも感謝したくなる。

「そうなんですよー！　豆から！　大豆から！　洗うところから！　こだわって大事にしてるんですよー！」

「え……？」

カウンター席でうなだれていた客が、若菜の言葉に感極まったというようにガタッと立ち上がった。

その叫んだ内容もさることながら、叫んだ人物の姿に若菜は驚いてしまった。

「え、なに……？」

小柄で骨ばった身体つき、白目が黄みがかってギョロッとした双眸、枝のような指先から伸びる鋭い爪。

それらひとつひとつの特徴が、目の前の人物が人間ではないと言っている。

「……妖怪？」

聞いたところで何にもならないと思ったけれど、若菜はつい尋ねてしまっていた。その瞬間、手にも背中にもぶわっと汗が噴き出した。冷静でいるべきだ、怖がってはいけないと思いながらも、それは難しいだろうと頭の隅で考える。

「そうです。あっしは小豆洗いでござんす」

若菜の問いかけに、目の前の人物は笑顔で答えた。

それによって若菜の中で最後に残っていた何かがふっつりと切れてしまう。

「あ、お嬢さん……」

「茂木さん⁉　茂木さん！」

妖怪を前にした驚きと恐怖とで、若菜はふらりとその場に倒れてしまった。古橋がとっさに駆け寄ってきて自分を呼ぶのはわかったけれど、それに応えることもできぬまま若菜は気を失った。

次に目を覚ましたとき視界に入ったのは、見慣れない天井だった。でも、ほっと落ち着く照明やほんのり漂っているおいしそうな匂いから、ここがまんぷく処なのだとわかる。

「茂木さん、気がつきましたか？」

「あの、どのくらい気を失ってたんですか？」

「たぶん五分も経ってないです。とりあえず寝かせてみたんですけど、目覚めてくれてよかったです」

「……すみません」

若菜は自分が椅子を並べた簡易ベッドに寝かされていたことに気がついて、ペコリと頭を下げた。食事処で倒れてしまうなんて恥ずかしい。

でも、古橋は若菜の言葉に申し訳なさそうに首を横に振った。

「こちらこそ、すみませんでした。こういう店だということを、もっと早くに言っておくべきだったのに」

「こういう店って……」

「うちは人間だけでなく、妖怪も訪れる店なんです。というより、妖怪のほうが圧倒的に多いかも」

古橋に言われて店内を見回した若菜は、また倒れそうになった。どうやら、仕事の疲れによって幻覚を見たわけではないようだ。

店内には、先ほど若菜を驚かせた小豆洗いだけでなく、頭に皿を乗せた河童らしき人、ひとつ目でニッコリした提灯がいる。少し気の早いハロウィンの飾りかと思っていた提灯も、どうやら妖怪だったらしい。やけによくできているとは思っていたのだ。

「こちらは常連の小豆洗いの新井さん、それと彼らがうちの従業員で皿洗い担当の河童の流川さんと、照明担当の提灯お化けの明野さんです。そして、スネコスリのスネとコスとリーです」

「小豆洗いと、河童と、提灯お化けと、スネコスリ……」

若菜は倒れそうになるのを何とかこらえ、改めてその場にいるメンツの姿を見る。妖怪だ。間違いなく。スネコスリにいたっては、そういう動物だと言われれば信じてしまいそうだけれど。

「彼らは妖怪ではありますが、人間と変わらないというか、害をなす人たちではないので、今後も懲りずに来店していただけたらと思うんですけど……。茂木さんにはおいしそうに、丁寧に食べていただけて作りがいがありますので」

古橋は控えめに、でもすがるように言ってくる。若菜としてもここの料理が食べられなくなるのは嫌だから、妖怪のことは……慣れるか気にしなければいいと前向きに考えてみる。

「あんなにおいしそうに豆腐を食べるお嬢さんが、あっしが驚かせたばっかりにもうここに来てくれなくなるなんて……うぅ」

なぜかわからないけれど、小豆洗いの新井が若菜を見て泣き始めた。もともと、この騒動の前から元気がなさそうだったから、何か刺激してしまったのかもしれない。

「あっしみたいなのがこの店に来ないほうが、大将のためになるってわかってるんです。あっしのような妖怪でもこうして食事をとりたい。そうは言っても普通の店じゃ無理だ。だからこそ、この店に通わせてもらってるんです。それに、自分が働く店の豆腐がどんなふうに料理されるかを見届けたい気持ちもあるんですよ……」

新井は何かに苦悩するように、頭を抱えた。その苦しげな呟きを聞いた若菜は、

驚いて倒れてしまったことに罪悪感を覚えた。

「新井さんは豆腐屋さんで働いてるんですよ。でも、小豆洗いなのに豆腐屋で大豆を洗ってていいのかと悩んでたので、茂木さんが自分の店の豆腐をおいしそうに食べる姿に感激したみたいなんです」

「そうです！　日頃、働いてる店の豆腐がどんなふうに食べられているかなんて知るよしもありませんでしたから、食べる姿を、喜ぶ姿を間近で見られたのが嬉しかったんです！」

古橋が説明すると、新井は拳を握りしめて言い添えた。本当に嬉しかったのだろう。心なしか猫背が伸びているし、表情からは憂いが晴れているように見える。

「そうだったんですか……妖怪さんにも、いろいろあるんですね。人間も妖怪も、暮らしていくためには多少は不本意な仕事もしなくちゃいけないってことですね」

新井が自分と同じように仕事に悩んでいるとわかって、若菜はちょっぴり親近感を抱いた。妖怪もいろいろ大変なんだと思うと、そんなに怖い存在ではなくなる。

「『も』ってことは、茂木さんも何かお悩みなんですか？」

噛みしめるように言った若菜を、古橋が心配そうに見てきた。

「実は、次の特集記事のことで少し悩んでて。ＳＮＳ映えするキラキラな食べ物特集なんですけど、実はああいった見た目重視の食べ物があんまり得意ではないんですよね。だから気持ちが乗らないというか」

「そういうことだったんですね。……確かに、しっかりきちんと食べたい人には向かない食べ物な気がしますね。何というか、若い女性たちが好んでいるああいう食べ物は可愛い霞とでも言うんでしょうか」

「可愛い霞！　まさにそうです！　私は仙人じゃないんで、もっと血肉になるものを食べたいし、できればお腹もきちんと満たされる食べ物の情報をお届けしたいなって思うんですよ」

古橋のたとえが絶妙で、若菜は思わず膝を打った。その言葉のおかげで、モヤモヤしていたものを言語化することができた。言語化できると、少しだけすっきりした気がする。

「あの、見た目重視の食べ物を特集するのが嫌なら、おいしさを保証できるお店の、見た目が華やかなメニューを探して特集するのはどうです？」

「……それです！」

新井が恐る恐るといった様子で発した言葉に、若菜は食いついた。ＳＮＳ映えといってもいろいろだ。十代の女の子をターゲットにするわけではないのだから、何もキラキラふわふわしている必要はない。

「普通のお店にも盛りつけが凝ってたり、きれいだったりするお料理ってありますもんね。目から鱗でした。それなら、気になってチェックしてたお店とかお気に入りのお店から、可愛いメニューをピックアップすればいいですよね」

古橋のおかげでモヤモヤが晴れ、新井のおかげで突破口が見えた。あのままひとりで悩んでいたら、きっといつまで経っても見えてこなかったものだ。

妖怪の存在には驚いてしまったけれど、今夜ここに来てよかったなと若菜は思った。

「実は私も他にやりたいことがあって、そこにたどり着くために今の仕事をしてるんですけど、ときどきこれでいいのかなって迷うときがあるんです。でも、とりあえず頑張るしかないんで、新井さんもめげずに頑張ってくださいね。新井さんが洗った大豆で作られたお豆腐、私は大好きです」

若菜はお礼の意味を込めて新井に言った。豆腐の感想だけであんなに喜んでくれたのだ。もしかしたら、ちょっとした励ましでも助けになるかもしれない。

立ち読みサンプルは
ここまで

ほんの少しの言葉で救われるというのは、きっと人間も妖怪も同じはずだから。

「……はい！　頑張ります！　大豆洗うのも、嫌いじゃないんで。ときどき小豆を洗いながら、これからもやっていきます」

新井はまた涙ぐみながら、大きく何度も頷いた。生きていくためにやりたいことは違うことを仕事にせねばならないのは人間だけではないのだなと思って、若菜は苦笑すると共に何となく慰められた。

「ごちそうさまでした。あ、あなたは明野さんでしたよね？」

会計を済ませてドアの外に出ると、待ち構えていたように提灯お化けの明野がいた。ひとつ目なのは見慣れないけれど、ニッコリした口元やそこからちょろっと出た舌には愛嬌があると思えてくる。

「もしかして、お見送りをしてくれるんですか？」

若菜が尋ねると、明野は答える代わりにふよふよと上下に動いた。どうやらそういうことらしい。お言葉に甘えて、若菜は敷地の外までついてきてもらうことにした。

おいしい料理を食べて、妖怪に驚いて倒れて、その妖怪に励まされて悩みが解消されて……信じられないような夜だった。でも、若菜の心はすっきりして、そして満た